

2023年12月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

## 氷 筍 集

十二月号 2023

|                 |       |
|-----------------|-------|
| 画家に看取られカンバスに秋の蝶 | 大石 高典 |
| 父の望郷しづかなりけり今朝の秋 | 河村 純子 |
| 秋風の行きつくところ千枚田   | 片山 旭星 |
| 弁当の蓋にころんとマスカット  | 碓氷 芳雄 |
| 名月の雲居にあればこそとあり  | 富沢 壽勇 |
| 渋柿と知るも囁つてみたきもの  | 川上 和昭 |
| 虫の音へ窓辺の草を残しをく   | 荒木 昭代 |
| ビルの中へ誰を訪ね来し黒揚羽  | 石原ゆき子 |
| つんつんと茎より暮れて吾亦紅  | 栗本 一代 |
| 三尺を秋の水落つ風連れて    | 田崎セイ子 |
| 夫在らば温め酒の夕餉かな    | 友永基美子 |
| 名を知らぬ草を抜き取り秋の庭  | 藤本 隆子 |
| 満月や筍竹ざらと占ひ師     | 加藤 広文 |
| 帳面の消し跡黒き残暑かな    | 加藤 剛  |
| しぶく雨前へ前へと阿波をどり  | 佐藤 慎一 |
| 邯鄲の祖廟慰むやうに鳴く    | 竹中 教子 |
| 星月夜さざ波寄する砂の星    | 津嘉山 典 |
| 哀れ蚊といふてはみても痒きこと | 石上 敦子 |
| 筑波嶺の峰をはなれぬ稲光    | 中村 順次 |
| 闇のなか地唄のひびく風の盆   | 森 裕子  |
| ままごとの砂のケーキや櫛の実  | 伊東 弥生 |
| 秋場所や行司は草履脱げたるに  | 入江 祐子 |
| 祭の夜あけて他人の顔となり   | 住田 祥子 |
| 朝がけに岩壁下る秋の谷     | 山崎こうじ |
| 荒くれの夜の顔となり秋祭    | 坂 利美  |
| 三日月をさん付けにして母を呼び | 大野 邦夫 |
| 秋空や雲の絵描く硝子窓     | 大畑 照子 |
| 竜淵に潜む殷墟の青銅器     | 小堀 恭子 |
| 玄関にまた入りたがり穴まどひ  | 前田 鈴子 |
| 満月や一村すべて青みたる    | 山口 容子 |
| 頃ほひと母が遺しし毛糸編む   | 細見 昌代 |
| 秋の名をつけて魚の旨さ言ふ   | 片岡 和子 |
| 子がをれば団栗博士めく父ぞ   | 寺川 貴也 |
| ふりまはず自作の毛鉤あまご釣  | 米倉 大司 |
| ポケットにあふれてもなほ栗拾ふ | 小川 妙子 |

二百十日追ひかぜにする門出かな  
颱風の眼や優星の煌と現れ

宮坂 美緒  
玉元 庄弘

2023年11月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

## 氷 筍 集

十一月号 2023

|                 |       |
|-----------------|-------|
| 蒸し暑き夜や椰子蟹の横断す   | 谷口 文子 |
| 虫干へ彼岸の風の吹くごとし   | 河村 純子 |
| かけつぎの匠ひつそり萩の風   | 朝田 玲子 |
| ぢいちゃんへ水桶抱へ墓まゐり  | 碓氷 芳雄 |
| 走馬灯うまく廻りしことのなく  | 仁田 浩  |
| 嵯峨ノ島は島の島なる良夜かな  | 川上 和昭 |
| 落蟬や樹上のこゑはまだ止まず  | 小畠 和  |
| 音ひとつせぬ炎昼の針仕事    | 植田 清子 |
| サバンナの樹形に似たり合歓の花 | 大石 高典 |
| 秘密基地知る友は逝き晩夏光   | 加藤 広文 |
| より高く跳ぬる漢の跳人かな   | 津嘉山 典 |
| 夕空や夜仕事前のソーダ水    | 森川恵美子 |
| 雲湧いて稔り田の幣ひるがへり  | 福江ちえり |
| 大雨や八月大名大慌て      | 丹羽 康夫 |
| 薄座布団は昔ながらよ泥鰌鍋   | 城戸崎雅崇 |
| 夏帽子リボンの色のゴムが欲し  | 斎藤よし子 |
| 処暑過ぎて空にいわしも泳ぐとふ | 原 順子  |
| 休暇明吾もパソコンも起動せず  | 石上 敦子 |
| 居なくともあると命日来たる秋  | 井本 陽子 |
| 鎮魂のサイレン遠し終戦日    | 入江 祐子 |
| 若衆の花火玉殻拾ふ秋      | 住田 祥子 |
| ペルセウス寄りの恋文星流れ   | 原田久仁一 |
| 墓洗ふ仕上げの経のうろ覚え   | 山田ミチ子 |
| 鳥の立つ川の浅瀬や長崎忌    | 齋藤 耐  |
| 熱引くと朝昼晩の西瓜かな    | 大辻 都  |
| 蚊を追うて子らの話をうはの空  | 國兼 弓華 |
| かけ声をかけ綱を引く迎へ鐘   | 幡山 杏  |
| 外風呂の湯気のぼりゆく夏の星  | 林 剛   |
| 釣溜とふ波静かなり赤とんぼ   | 藤本千恵美 |
| 避暑地的入院中と残暑なか    | 細見 昌代 |
| 秋初め窓辺に母の針仕事     | 山本 京子 |
| 風鈴や鉄より出でて軽ろき音   | 杉浦 康子 |

|                      |       |
|----------------------|-------|
| 身にしむやボルネオ雨季のジャングルに米倉 | 大司    |
| 日ごろ見ぬ人の溢るる盆踊         | 小川 妙子 |
| 送火に世代の点す火のしかと        | 宮坂 千種 |
| 木苺や手招きされし秘密基地        | 宮坂 美緒 |
| 雲湧くは噴煙のごと夏の山         | 杉本 伸一 |

2023年10月

当月の水壺集・氷室集より尾池葉子抄出

## 氷 筍 集

十月号 2023

|                  |       |
|------------------|-------|
| 粘菌はいづこに潜む熱帯夜     | 大石 高典 |
| 形代や納むる箱に名の溢れ     | 小嶋 和  |
| アイスパフェ底に届かぬパフェの匙 | 中島 冬子 |
| 波の響きに千枚の青田かな     | 福江ちえり |
| 放しやるために捕へる糸蜻蛉    | 川上 和昭 |
| オーデコロン力士の風とすれ違ふ  | 鴻坂 佳子 |
| 振花や子に逆らはず従はず     | 森 幸子  |
| 水浴ぶる目白片目に空仰ぎ     | 齋藤 亜矢 |
| 友の植ゑし梨挽ぐ庭に友のなし   | 福 のり子 |
| クレヨンの二色折れたり送り梅雨  | 加藤 剛  |
| 水鱧の牙もた生くる身の白さ    | 朝田 玲子 |
| 鬼百合の仇なすほどに反り返り   | 仁田 浩  |
| 湧く雲や夏空深く帆ほ開き     | 牧田満知子 |
| 髻小さき夏帯小さき祖母の背ナ   | 伊藤 弥生 |
| 刈られても刈られてもなほ草いきれ | 新藤 克彦 |
| 朝焼や峰の後光となる寸暇     | 津嘉山 典 |
| ヒロシマや子を抱く母の爆心地   | 田中 勝  |
| 船鉾や舳先高々曳き動く      | 細見 昌代 |
| 暑き日や子規の偉大さ身に比して  | 西澤 勝  |
| ほんたうにかすかやぼんと蓮開く  | 齋藤よし子 |
| 百日紅ゆらゆらゆれて日の動く   | 原 順子  |
| せせらぎに晒し皮採る葛かづら   | 秋山 陽子 |
| 一輪の花も踏まじと夏の山     | 石上 敦子 |
| 開襟シャツ医師の前にて胸を張り  | 小長井 敬 |
| 廃炉遠し瓦礫の山に晩夏光     | 山崎こうじ |
| 糸とんぼ宿る支流の支流かな    | 加藤 広文 |
| 木漏日の翳の変るも秋近し     | 大畑 照子 |
| 夏蜜柑ひよいと見えたり土堀越し  | 山口 容子 |
| 天井川跡は公園送り梅雨      | 齋藤 耐  |

|                 |       |
|-----------------|-------|
| 蟬時雨止む空模様知らずごと   | 出淵とき子 |
| 利休草とふ蔓が伸び夏の暁    | 藤木千恵美 |
| 秋に入る護摩焚く炎やはらかし  | 村田 昌子 |
| 船渡御の雅楽に紙垂の揺れやまず | 杉浦 康子 |
| 鎌倉は源氏蛭の数まさる     | 片岡 和子 |
| 夜の森の葉のすきまより月涼し  | 米倉 大司 |
| 野の音のふりそそぎくる夏の雨  | 宮坂 美緒 |
| 梅雨晴や板を踏み込む釜の風呂  | 杉本 伸一 |

2023年9月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

## 氷 筍 集

九月号 2023

|                 |       |
|-----------------|-------|
| 端座して奈良団扇なるしなりかな | 朝田 玲子 |
| 新生姜父の癖ある送り状     | 碓氷 芳雄 |
| 一蹴りに開く引戸なり梅雨半ば  | 中島 冬子 |
| ころころと転げ見する子葭戸入れ | 竹中 教子 |
| 何をしてみても夕焼空の下    | 川内 一浩 |
| 路地奥の筆師の家や蟬時雨    | 栗本 一代 |
| 荷造りを終へし窓辺の白夜かな  | 福 のり子 |
| 時の日や電波時計に電波来ず   | 加藤 剛  |
| 剪定の荷台に積まれ蝸牛     | 鳥居 裕子 |
| 赤鱗の満座を敵に暴れをり    | 牧田満知子 |
| 肌脱の気炎をあぐる構へかな   | 富沢 壽勇 |
| 境内に役目を終へし御柱     | 森川恵美子 |
| 時の日や厚狭に三年寝太郎像   | 小堀 恭子 |
| 草茂る草を寝床に昼の猫     | 津嘉山 典 |
| 噴泉や釣舟じつと動かざる    | 清水 淑江 |
| 時刻表に折目の付くよ梅雨曇   | 島田 峰夫 |
| 羽衣の糸になりさう合飲の花   | 羽尾 芳樹 |
| 養老の故事にサイダー甘露なり  | 原 順子  |
| 梅雨空の西に黒雲急がれば    | 秋山 陽子 |
| 荒梅雨や皮膚科の女医の荒治療  | 新藤 克彦 |
| 海好きの君はみづいろラムネ飲む | 住田 祥子 |
| 殺し搔きと最後の搔きに漆搔く  | 丹羽 康夫 |
| 夏富士や木組みの香るテラス席  | 原田久仁一 |
| 親燕交互に飛行して威嚇     | 山崎こうじ |
| 太陽の動きに合はせ日向水    | 大畑照子  |
| 夏雲や間伐の音はね返る     | 小堀 尚美 |

|                 |       |
|-----------------|-------|
| 夏空の校庭広く一輪車      | 田辺美千代 |
| 飛魚や潜水艦の浮上せり     | 山口 容子 |
| 黒南風や能登川駅の地蔵尊    | 齋藤 耐  |
| 万緑の山路や冥路めく昏さ    | 田中 白秋 |
| 朝焼やぽんぽん舟を見送りて   | 林 剛   |
| 氷河よりアイガーの峯あふぐのみ | 山中伊蘭子 |
| リヤカーの魚屋捌く瀬戸のちぬ  | 山本 京子 |
| 海峡をまたいで虹の立ちにけり  | 片岡 和子 |
| 風鈴に時の移ろひありにけり   | 寺川 貴也 |
| 夏木立空が小さくなりけり    | 青井 律子 |
| バイク群れて疾走の風若葉山   | 小川 妙子 |

2023年8月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

## 氷 筧 集

八月号 2023

|                  |         |
|------------------|---------|
| 馬の尾のひゆんと一振り夏に入る  | 朝田 玲子   |
| 慰霊碑に伏す祖母の影夏の雲    | 碓氷 芳雄   |
| 鬼平に見張り頼むか小判草     | 中島 文子   |
| 虎が雨わが知らぬ間に里の消ゆ   | 西五辻芳子 ★ |
| 薔薇白し君の代りは居なくとも   | 川内 一浩   |
| 薫風やはるかに和歌の沖の石    | 大野 邦夫   |
| ギブスの足庇ひ薊の咲くを見に   | 大野千鶴子   |
| 新参の顔の加はり溝浚へ      | 川上 和昭   |
| ビル二階より見て神田祭かな    | 城戸崎雅崇   |
| かりゆし来て初夏の街行く身の軽し | 福地 義雄   |
| 齡聞かれ食べて変らず柏餅     | 村木 道子   |
| この石に妣も一服麦の秋      | 森 幸子    |
| 夏蝶の羽わづかなる風の立ち    | 齋藤 亜矢   |
| 菜種刈る少なからずは零れ落ち   | 仁田 浩    |
| 遠山を橋より探す清和かな     | 加藤 剛    |
| 旅終へし吾な迎へそ御器齧     | 小嶋 和    |
| 芒種なり田に引く水の猛きこと   | 森 壹風    |
| 神山に風吹き渡る祭かな      | 竹中 教子   |
| 園長の降ろすに長き鯉幟      | 鴻坂 佳子   |
| 雉鳴いて朝日の走る川面かな    | 福江ちえり   |
| 藤の香の紫の風通りけり      | 小堀 尚美   |
| 大師像へ深き礼せる遍路かな    | 田中 白秋   |
| 大文字山の火床や緑さす      | 河村 純子   |

山藤をたどり古墳の大鳥居  
夏蝶を追へど届かず走る網  
葉桜のざわめきを浴び物思ふ  
一衣帯水黄砂の国と隣り合ふ  
初夏やジャスミン香る烏龍茶  
畏まり男子三人風炉稽古  
屋根突き刺すぱりぱりと雹が降る  
苗運び受け取る父と渡す子と  
常夜灯いまは電球走り梅雨  
潮干狩宝探しつ裾濡れつ  
ふらここを待つぬひぐるみ抱へみて  
雷神の坐すかと思ゆる雲の峰  
畦を刈る音の青田や通学路  
潮干潟イノー遊びの海青し

清水 淑江  
島田 峰夫  
斎藤よし子  
中村 順次  
秋山 陽子  
丹羽 康夫  
田辺美千代  
山口 容子  
齋藤 耐  
國兼 弓華  
佐藤 慎一  
寺川 貴也  
坂元百合子  
津嘉山 典

2023年7月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

## 氷 筍 集

七月号 2023

連れだつて来たりてひとり花の下  
釘ひとつ求め歩くも遅日かな  
両の手につかむ重さの桜鯛  
傘のうちと軽き溜息花の雨  
石仏を荒らすはけもの涅槃西風  
苔もまた新緑なせり延暦寺  
蛇穴を出でて疏水の水くぐる  
会へずとも声の便りや花の雨  
海風の強き牧場や花薊  
朝刊を取り朝月と朝ひばり  
黄水仙月の魔法に揺れてをり  
岩の色鮮やかにして穀雨かな  
一杖の身に冥利なる初鯉  
山独活のひと味欲しき夕餉かな  
仔牛らは小屋を離れず花かへで  
いつまでも客地と思ふ夕桜  
山抜きの跡のなぞへに芝桜  
退職や朧月夜のギムレット  
休業の字は閉店に春惜しむ  
家康の保護に有東木の山葵の田

仁田 浩  
朝田 玲子  
大石 高典  
川内 一浩  
中井 昭雄  
小畠 和  
竹中 教子  
植田 清子  
川上 和昭  
鴻坂 佳子  
福 のり子  
齋藤 亜矢  
田中 白秋  
津嘉山 典  
福江ちえり  
片岡 和子  
清水 淑江  
森川恵美子  
斎藤よし子  
原田久仁一

|                    |       |
|--------------------|-------|
| ゴールデン・ウイーク過ごすペンとメモ | 松澤 博子 |
| ネクタイの締めかた習ふ四月かな    | 大畑 照子 |
| 麗かやさぎ波めきし高野切       | 小堀 恭子 |
| 城跡の石垣なづる余花の雨       | 小堀 尚美 |
| マスクなき返事はじけて新入児     | 田辺美千代 |
| 点と消え線と落ち来る雲雀かな     | 中西 則雄 |
| 鉄橋を鴉てくてく春深し        | 齋藤 耐  |
| 兜の前きりと立つは花菖蒲       | 國兼 弓華 |
| おかへりに声に間に合ひ夕燕      | 佐藤 慎一 |
| 白鷺のすばやし魚を鵜呑みして     | 幡山 杏  |
| 鐘霞むかつて川行く百石船       | 林 剛   |
| 石積の湖岸や稚鮎追ひさで漁      | 細見 昌代 |
| 鞆や幾何の補助線浮かぶまで      | 加藤 剛  |
| 雨乞や夜干しの乾く朝が来て      | 杜 博之  |
| 雨なれば庭の牡丹に傘をさし      | 杉本 伸一 |
| 猫の子へ立てよ歩めと囃したて     | 田崎セイ子 |
| 失せし亀みるよ春日の庭にゐる     | 玉元 庄弘 |

2023年6月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

## 氷 筍 集

六月号 2023

|                     |       |
|---------------------|-------|
| 払暁や潮ぼたぼたと若布上ぐ       | 朝田 玲子 |
| 転りしペンの先まで春来る        | 河村 純子 |
| 透きとほるしらす豊漁被災の地      | 植田 清子 |
| 尾の長き鳥の遊びや芝青む        | 城戸崎雅崇 |
| 寄書を余さず埋めて卒業す        | 福地 義雄 |
| 父の手は木の瘤のやう草の餅       | 前田 鈴子 |
| まんさくのぐうちよきぱつとほどけ咲く福 | のり子   |
| 下駄箱にひらがなの名や風光る      | 碓氷 芳雄 |
| すれ違ふ舟の波間や風光る        | 齋藤 亜矢 |
| 啓蟄や名誉教授の出勤簿         | 福田 将矢 |
| 山城の堀を流るる花の雲         | 福江ちえり |
| 白子干す海の青さを風にのせ       | 鴻坂 佳子 |
| 交差点別るる時のおぼろ月        | 森川恵美子 |
| 歌垣の丘や初蝶もつれ合ふ        | 中村 順次 |
| 次の枝へ三たび羽ばたき雀の子      | 加藤 剛  |
| 明け方の部屋や真なかのヒヤシンス    | 大辻 都  |
| 地下街の迷路にはまる四月馬鹿      | 大野 邦夫 |

街なかは姿を見せず猫の恋  
一輪が十輪となり梅の花  
背番号ぴんと干したり花曇  
娘宛の学位記届く春やいま  
目覚めよき今日休日やクロッカス  
春ストーブ便利さを捨て燐寸置く  
一夜にて伸びてほどけて牡丹の芽  
春暁や夢なかばめく始発駅  
たらの芽摘むとき晴天を仰ぎ見て  
尾根筋より流れ激しき雪解川  
島々に祈りの満つる春の宵  
バス停は文化庁前紅枝垂  
黒松の雪吊取れて枝ばす  
五月待つ兜の柄の文具店  
白蝶に挑み逃げられまた挑み  
鎌倉や歩道橋より春の海  
国を問はず人の溢るる京の春  
三輪山の神の鎮もる初音かな  
空と海とけあふ頃を春の月  
水音と木々の鳥ごゑ夏神楽

田中 勝  
西澤 勝  
清水 淑江  
原田久仁一  
宮原亜砂美  
坂 利美  
大畑 照子  
小堀 恭子  
小堀 尚美  
田辺美千代  
山口 容子  
石原のり子  
小川 豊子  
國兼 弓華  
佐藤 慎一  
細見 昌代  
山本 京子  
松村 滋子  
片岡 和子  
杜 博之

2023年5月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

## 氷 筍 集

五月号 2023

初旅や恩師弔ひ海に立つ  
人去んで杣山の鳴る涅槃西風  
冴返る舳先するどき月の舟  
波音の恋唄となり春初め  
猫ふりむいて沈丁の闇に消ゆ  
寒行の老僧の手を取りにけり  
椿落つ波紋の一つ二つ三つ  
紅梅や三角屋根の見ゆる丘  
穴道湖の音や鋤簾のしじみ搔  
梅が香やけさの雨戸は滑りよき  
白息の耳へ近づき囁ける  
節分となれば恋しき吉田山  
余寒けふ力を込めて窓を開け  
家ごとにかたちことなり雪達磨

小 鷲 和  
福江ちえり  
中島 冬子  
川内 一浩  
栗本 一代  
大野千鶴子  
福 のり子  
齋藤 亜矢  
鳥居 裕子  
朝田 玲子  
仁田 浩  
大石 高典  
河村 純子  
富沢 壽勇

|                  |       |
|------------------|-------|
| 磯の香の光纏うて若布刈る     | 小堀 尚美 |
| 変はりゆく街に百年藪椿      | 竹中 教子 |
| 人恋うて話し過ぎたる余寒かな   | 小堀 恭子 |
| 白鳥の声いつせいに北帰行     | 西澤 勝  |
| 春寒し一番星は月に添ひ      | 清水 淑江 |
| 屋根よりの雪解の音や猫眠る    | 櫛淵かりな |
| 嫁入りに持つ桑の木のおひなさま  | 森川恵美子 |
| 日脚伸ぶくつろぎのときサンルーム | 中村 順次 |
| 学び舎に白髪揃ひうららけし    | 森 裕子  |
| いざ行くぞと車走らす雪の道    | 松澤 博子 |
| 旅人の瞳るは春の高き波      | 坂 利美  |
| スニーカーぐにゆうと窪む春の泥  | 大畑 照子 |
| 煙立ち春の里山動き出す      | 田辺美千代 |
| 子の家に仔犬増えたり春立つ日   | 山口 容子 |
| 春の夜やピアスのやうに月と星   | 國兼 弓華 |
| 年の豆噛めば疲れの残りけり    | 幡山 杏  |
| 老梅の社へお礼参とす       | 林 剛   |
| 枸杞の芽を炊込飯にたんと食ふ   | 山中伊蘭子 |
| 春時雨揺るるのつぼの草一つ    | 加藤 剛  |
| 霜降りし草びしびしと頬を打つ   | 松村 滋子 |
| ちらちらと茂みの奥に岩菲咲く   | 杜 博之  |
| 春泥に残る轍を歩きけり      | 小川 妙子 |
| 父母と歩幅合はせる春日影     | 津嘉山 典 |

2023年4月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

## 氷 筍 集

四月号 2023

|                |       |
|----------------|-------|
| 物干竿からんと響き寒の入   | 朝田 玲子 |
| 参道の松の枯れあり実朝忌   | 大野 邦夫 |
| 山茶花の風に揉まるる御幸道  | 福江ちえり |
| 殺気立つ剣の間合や寒稽古   | 碓氷 芳雄 |
| 寒肥やおきばりやすと柿の木へ | 中島 冬子 |
| 顔見世や役者の親といふ人と  | 谷口 文子 |
| 笹鳴の藪を抜け来て空広き   | 竹中 教子 |
| 初漁や他へ越さぬと竿頭    | 宮原亜砂美 |
| 咳ながら急ぐ街かど風の中   | 川内 一浩 |
| 寒卵値上げの渦の中にあり   | 石原ゆき子 |
| 水源の落葉さらひや一軒家   | 川上 和昭 |

誰もみぬぶらんこ夢に遊ぶとき  
ストーブ恋しと隣のロシア人  
雑煮椀また手にしたる齡かな  
田の神へ古老律儀に鋤始  
野兎の跳ねてめでたき二日かな  
藁苞に三つ括りて寒卵  
お年玉握りしめ行く本屋なく  
暖冬や群の膨るる魚のゐて  
凧の行先いつこ風見鶏  
冬月やおちよこ静かに置く男  
悴むや生徒手元の暗記帳  
水田いま大白鳥の浄土なる  
竜天に昇るやチェンバロの響き  
節分の鬼役いつも父となり  
屋根に雪ずしりと重し夕日射す  
散つて来る落葉散つてゆく落葉  
うとうとと車窓に枯木とんでいく  
自転車の轍蹟く寒早  
大寒や路面の滑り踏みしだく  
春隣昭和豪雪忘るまじ  
繕ひの針と糸もて冬籠  
砂利踏みて神に知らする初詣  
雑煮椀の主顔なる頭芋  
一步づつ靴跡追うて雪の道  
生田の宮いま曲水の風のなか  
初糶へ船出の漁師午前二時

栗本 一代  
藤本 隆子  
村木 道子  
森 幸子  
福 のり子  
仁田 浩  
河村 純子  
大石 高典  
津嘉山 典  
福田 将矢  
富沢 壽勇  
小堀 恭子  
山中伊蘭子  
大畑 照子  
櫛淵かりな  
中村 順次  
森 裕子  
丹羽 康夫  
松澤 博子  
坂 利美  
小堀 尚美  
荒木 昭代  
細見 昌代  
山本 京子  
杜 博之  
田崎セイ子

2023年3月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

## 氷 筍 集

三月号 2023

梟のこゑ御陵の森統べて  
嵌め障子そこのみ白し古建具  
薄墨の葉書の冷えて届きけり  
故郷へ道ひた走る年の空  
中庭に日の来る小春日和かな  
被爆樹の枝重さうに雪の花  
くだら野やかかさこそ駆くる音のあり  
一陽来復話相手の犬と居る

仁田 浩  
中島 冬子  
福江ちえり  
碓氷 芳雄  
川内 一浩  
田中 勝  
森 壹風  
川上 和昭

|                    |       |
|--------------------|-------|
| 米原の空はやばやと冬の雲       | 宮原亜砂美 |
| 冬満月地球の惨禍癒すごと       | 植田 清子 |
| いつの世も戦火の絶えず年の果     | 加藤かず子 |
| 逆光に色深めたる冬紅葉        | 城戸崎雅崇 |
| 白繭にうさぎを描く師走かな      | 立石 律子 |
| 着ぶくれて雀の歩み観てをりぬ     | 友永基美子 |
| 行列のいまだ短き曆売         | 村木 道子 |
| 柿似合ふ皿に柿盛る窯出し日      | 福 のり子 |
| 間延びする返事るいべの溶けやすく   | 朝田 玲子 |
| 首にある電話番号狩の犬        | 鳥居 裕子 |
| 虫食ひの規則的なる木の葉かな     | 齋藤 亜矢 |
| おしやべりの絶えてさくつと牡蠣フライ | 小畠 和  |
| 白きタオル神棚用に年用意       | 森川恵美子 |
| 冬夕焼往路が帰路となり三年      | 山本 京子 |
| 聖歌隊街の喧騒鎮めけり        | 細見 昌代 |
| 坂がかかる小諸なりけり冬の月     | 中村 順次 |
| 大雪や眠らぬ山と見ゆる富士      | 原田久仁一 |
| 白障子昔ばなしの影絵見せ       | 大畑 照子 |
| 風の日軒の干菜の匂ひけり       | 小堀 尚美 |
| 水滴に朝日とけ入る冬の薔薇      | 田辺美千代 |
| 浪音の荒き母屋や石露の花       | 森 幸子  |
| 黒豆の脱穀すれば霰降る        | 山口 容子 |
| 隙間風もぐらたたきのごとく埋め    | 石原ゆき子 |
| 餅搗は戦力外と言はれけり       | 大野千鶴子 |
| 粉雪や見知らぬ町のそば屋の灯     | 林 剛   |
| バケツごと夫に見せやる初氷      | 藤本 隆子 |
| 湖東より琵琶湖を跨ぐ秋の虹      | 松村 滋子 |
| 火事近し胸の騒ぎの収まらず      | 田崎セイ子 |
| ちりぢりに家路急ぐも村時雨      | 津嘉山 典 |

2023年2月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

## 氷 筍 集

二月号 2023

|                   |       |
|-------------------|-------|
| われからのけふもあしたもたゆたへる | 朝田 玲子 |
| 愛づる人少なし枇杷の花が好き    | 中島 冬子 |
| 七歳は知らぬ顔して千歳飴      | 仁田 浩  |
| 言の葉もよく煮込まれて薬喰     | 谷口 文子 |
| 捨舟のことごとく傾ぎ冬の草     | 福江ちえり |

|                  |       |
|------------------|-------|
| 秋惜しむ吐息ため息束にして    | 河村 純子 |
| 廃業の料亭風の掃く落葉      | 石原ゆき子 |
| 亡き妻の星座占ふ冬の夜半     | 川内 一浩 |
| 甲斐路いふ葡萄を食めば甲斐の空  | 植田 清子 |
| 禁酒せし夫へ新種の案内来る    | 大野千鶴子 |
| 木犀や漢方薬はじんわりと     | 川上 和昭 |
| 蒲の穂のなかば穂祭となりにけり  | 城戸崎雅崇 |
| 白紙に透き万灯の炎立つ      | 栗本 一代 |
| 風に向け汽笛鳴らして神無月    | 田中 勝  |
| 笹鳴や息を潜めて確かめて     | 友永基美子 |
| 待合に待つこと長し冬はじめ    | 藤本 隆子 |
| 独り居やおでんを少し酒少し    | 村木 道子 |
| 朝霜や鳥のつひばむ音の降る    | 齋藤 亜矢 |
| 栗鼠よ吾に風食らふごと逃げにけり | 福 のり子 |
| 遠慮なく引きたる大根折れにけり  | 大石 高典 |
| 牡丹焚火ただ見つめみる日暮どき  | 浅利 美鈴 |
| 破芭蕉揺る狭間の雲流れ      | 津嘉山 典 |
| 本の帯の外れやすさよ夜の長き   | 鴻坂 佳子 |
| かりがねの水脈曳く影のすべりゆく | 竹中 一花 |
| 匂ひより酔うて鱈酒まはりけり   | 森 壹風  |
| 冬銀河ドヴォルザークのチェロ響く | 櫛淵かりな |
| 小春日や溶岩台地歩く旅      | 森川恵美子 |
| 立冬の朝やのど飴二つ舐め     | 齋藤よし子 |
| 秋刀魚買ひ三時といへば夕ごろ   | 中村 順次 |
| 帰るとき釣瓶落しの日と競ふ    | 松澤 博子 |
| 冬晴や水脈ひとすぢの白き船    | 小堀 恭子 |
| ひたひたと潮の満ち来る冬茜    | 山口 容子 |
| 文化の日けふはやめよう口喧嘩   | 山田ミチ子 |
| 木漏日のこぼるるポプラ雁渡し   | 國兼 弓華 |
| 納豆の夕飯となり秋遍路      | 田中 義信 |
| 武蔵なる堀兼の井に落葉積む    | 林 剛   |
| 船に行く琵琶湖や鳩の数をよみ   | 松村 滋子 |

2023年1月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

## 氷 筍 集

一月号 2023

|                |         |
|----------------|---------|
| 客去りし灯りひとつの夜寒かな | 小  寫  和 |
| とんぼうや自在に動く馬の耳  | 朝田 玲子   |

|                  |         |
|------------------|---------|
| 稲刈つて庄内平野なほ広し     | 佐々木 成   |
| 月明り御神楽「告」と言ひ初む   | 西五辻芳子 ★ |
| をみならの鬼女にはなれぬ紅葉狩  | 河村 純子   |
| 挑むとも祈るとも見ゆいぼりむし  | 中井 昭雄   |
| ジンジャーの花の香ほのかなる薄暮 | 植田 清子   |
| 竹竿の青きを添へて松手入     | 川上 和昭   |
| うそ寒やゑくぼ隠るるマスクして  | 大石 高典   |
| 寝つけぬ夜鳴くも鳴かぬも虫しだい | 中島 冬子   |
| 太陽が味方となりぬ秋の朝     | 石原ゆき子   |
| 秋深し二役にして独り言      | 大野千鶴子   |
| 茅葺の影少しづつ秋の暮      | 栗本 一代   |
| 夕照の瀬田に降りくる雁のこゑ   | 竹中 一花   |
| 達磨の目二つめ入るる良夜かな   | 友永基美子   |
| 栗を剥く暫し無口の婆となり    | 藤本 隆子   |
| 頭のみ買ひたし鮭の氷頭なます   | 鳥居 裕子   |
| いつよりぞ他郷の月が我が月に   | 福 のり子   |
| 啄木鳥や木のてつべんに風の立つ  | 齋藤 亜矢   |
| 突き指の青黒きこと野分立つ    | 大辻 都    |
| 来し方の思ひ温め酒にあり     | 大野 邦夫   |
| 衿立てて秋風をきりパリジェンヌ  | 浅利 美鈴   |
| 秋寒し沈みし村の八ツ場ダム    | 森川恵美子   |
| 道の辺の団栗にふと手が伸びて   | 城戸崎雅崇   |
| 釣道具に父の文字あり秋深し    | 斎藤よし子   |
| 七尾湾の静かなる日や神無月    | 松澤 博子   |
| 秋澄むや線の美ならふ九成宮    | 小堀 恭子   |
| 軒先に搗栗作り昭和なり      | 森 幸子    |
| 手をつなぐ温さ恋しき芒原     | 山口 容子   |
| 猫撫でて猫と眺むる鱗雲      | 山田ミチ子   |
| 諸掘りし諸つながるを見せに来る  | 大野千鶴子   |
| 酔眼に裸火のごと曼珠沙華     | 田中 義信   |
| 古道いま神輿過ぎたる静けさに   | 林 剛     |
| 灯の細き大原の里栗の飯      | 細見 昌代   |
| 立飲に歌舞伎の余韻秋の夜半    | 佐藤 慎一   |
| 牽牛花その名似合はずたをやかに  | 山中伊蘭子   |
| 池広し水尾のびやかに鴛鴦の杳   | 青井 律子   |